

## 岡山孤児院の解散と運営体制の経緯（2）

### The progress of the Okayama Orphanage's Dissolution and Its Administration System

菊 池 義 昭\*  
Yoshiaki Kikuchi

#### 要約

本稿は、岡山孤児院が解散する1926（大正15）年の運営体制の経緯をまとめたものである。すでに同院の運営体制の展開を10期に分けて解明し、その第10期の最終年の運営体制を、茶臼原孤児院の事務所、養育部を中核とし、それに岡山事務所が加わる体制の中でどう展開し、8月25日の第式拾参回評議員会後の「解散」決議後もそれがどう引き継がれたかを明らかにした。また、その前提としてこの「解散」をだれが主導したかを確認したが、それは大原孫三郎評議員が主導し、実際の手順は柿原政一郎が、職員や殖民と協議するかたちで進められた。このため、茶臼原孤児院はさらに縮小されるが、これまで事務所が担っていた仕事と役割は「解散」後も残され、養育部も男女各1家庭舎体制は継続し、在籍児はあまり減少せずに石井記念協会に引き継がれることになった。さらに殖民は、ブラジルへ移住する者がいて少し減少したが、3ヶ所の殖民地は残り、「茶臼原農村」は先の石井記念協会と3ヶ所の殖民によって継承されることを確認した。

キーワード：岡山孤児院、石井十次、大原孫三郎、児童福祉史、養護実践史

---

\* 児童福祉学専攻

## はじめに

本稿では、前稿<sup>(1)</sup>に引き続き岡山孤児院の運営体制の第10期にあたる、1923（大正12）年から1926（同15）年までのうちの最終年の1926年のそれをまとめることにする。第10期は、岡山孤児院が解散に向う時期であり、特に本稿でまとめる1926年は岡山孤児院が解散した年である。その意味では、同院の運営体制もこの年で終結することが予想できるが、実は完全には終結せず、その後は石井記念協会に運営が引き継がれて行くようであり<sup>(2)</sup>、本稿では岡山孤児院の解散から同協会へ移行する1926年の運営体制を解明することにする。

### 1) 岡山孤児院解散前後の検討課題

岡山孤児院の解散によって最も影響を受けるのは、言うまでもなく院児が生活していた茶臼原孤児院の運営の展開であり、本稿では「解散」前後の同院の運営内容と石井記念協会への移行の実態を明らかにしてみる。そのためには、①「解散」決定の経過と茶臼原孤児院での対応、②同院事務所を中心に実施して来た賛助員（金）募集活動（以下賛助金募集と略）、慈善講演会活動、農業見習生の拡大などと職員体制他の関係、さらに③里子依托促進をすすめていた養育部の経過と通学児の状況、④松本圭一によるブラジル移住者募集と植民地の動向および「茶臼原農村」の実態、⑤岡山事務所（本部）の役割の5点を中心に、その具体的な運営の実態を解明して行くことにする。

### 2) 「解散」と茶臼原孤児院の対応

#### (1) 全体的動向と職員体制の変化

8月25日の第式拾参回評議員会直後の臨時評議員会で岡山孤児院の解散が決議されるが<sup>(3)</sup>、すでに7月5日には財団法人中央社会事業協会より「解散」に関する新聞報道の真意を問い合わせる文書が送付されるなど<sup>(4)</sup>、「解散」が社会的に表面化していた。そんな状況下での茶臼原孤児院の運営の動向などをまとめると表1のようになり、1月18日には活動写真技師の土居通秀が退職し、29日には石井院長銅（胸）像除幕式、翌30日には石井院長十二周年記念会が開催される<sup>(5)</sup>。4月5日には下村久主婦が退職し、5月17日には山本哲二郎事務員が永眠するなど<sup>(6)</sup>、職員体制（表2）に縮小と再編も生じることになる。

また、松本圭一が提唱するブラジル移住に賛同し殖民家族、出身者がそれに参加し、「茶臼原農村」も変動を見せ始めることになる。さらに、「財政再建」の切札として進めて来た賛助金募集と慈善講演会の開催も、前者が4月19日末藤新市が鹿児島市より帰原することで、後者も7月12日大島三郎が帰院したことで中止となり<sup>(7)</sup>、「解散」への動きが内

1926年の茶臼原孤児院の運営の動向

〈表1〉

事	項
1月1日	早天祈祷会。6日大牟田市下川セツより乳児救助依頼あり、7日自宅救助実施と回答。
1月13日	百田孟一來院。院児6人の適令届を各出身地へ送付。出身者よりブラジル行の希望あり。
1月14日	末藤賛助金50円を持参し帰院。16日大島帰院し、今後3ヶ所で開催。18日土居通秀辞職。
1月21日	百田帰岡。23日児島虎次郎来院。林源十郎より200円寄付。24日茶園成績報告
1月25日	百田来院。28日大原孫三郎、松本圭一他来院。スープ晩餐会。29日石井院長銅像除幕式。
1月29日	茶話会。30日石井院長十二周年記念会。2月4日院児6人の戸籍謄本請求。5日招待会。
2月10日	見習生無断家出の通知。21日松尾、佐藤の両主婦の表彰式。17日茶園設置奨励金着。
2月25日	造林事業に対する慶福会助成1,000円交付決定。27日高橋善導来院、28日ブラジル行懇談。
3月1日	下川セツ依頼児を自宅救助と決定。岡山県より御下賜金1,000円、奨励金800円の下付通知あり。
3月5日	大阪毎日新聞社慈善団より19円寄付。15日長野他2人松苗購入で島之内等へ出張。
3月16日	末藤賛助金140円持参。松苗5万本着。20日ベテー夫人取次で217円の寄付。
3月22日	殖民1家族ブラジルへ出発。24日殖民1家族ブラジルへ出発。
3月27日	鹿児島県での慈善講演会開催の免税許可。末藤賛助金募集で鹿児島市へ出張。
3月28日	茶種子3石購入。29日宮崎市のワーレン夫妻来院。第二回茶園品評会で1等賞受賞。
3月31日	柿原政一郎来院。日曜学校教師小野田勇送別会。松尾家と下村家合併し、松尾主婦が担当。
3月31日	松苗植付着手。4月3日柿原、殖民と協議。4日下村主婦送別会、5日退職し帰郷。
4月13日	石井院母病氣。14日院児、殖民他8人のブラジル行の送別会。19日末藤鹿児島市より帰院。
4月20日	柿原来院。21日百田来院。5月2日新茶摘み着手。3日壱岐京都館へ移転。大島一時帰院。
5月10日	百田着院。14日木城尋常小学校の高学年生53人を雇入新茶摘実施。16日山本哲二郎入院。
5月15日	病氣中の石井院母は、小野田、館野友春の付添で倉敷町児島虎次郎宅へ出発。
5月17日	木下医院入院中の山本永眠。18日小野田、林源十郎と帰院し、19日山本の葬儀執行。
5月21日	桑葉売却。25日小野田夫人院母看病のため倉敷町へ。26日殖民は自作農創設維持資金借用の件で相談。
6月1日	大原より記念館建築費送付、院母は腎臓炎と報告。3日出身者病氣となり来院。5日百田来院。
6月11日	方舟館を旧静養館跡に移転。13日壱岐姉帰院。14日松尾主婦院母看病のため出発。
6月15日	県耕地整理課長、山崎延吉、深見和彦県属、宮崎新聞記者他来院。17日大阪朝日新聞記者来院。
7月5日	中央社会事業協会より解散報道に対し問い合わせ。21日大原総一郎他来院。8月2日壱岐しげ子退職。
8月4日	耕地整理課で測量に着手。9日林源十郎よりラジオ寄贈。10日岡山県庁より解散の件問い合わせ。
8月12日	院児蚊口浜へ海水浴。13日柿原来院。14日柿原と殖民相談。松尾主婦帰院。
8月15日	長野と柿原面談。16日百田帰岡。18日殖民1家族ブラジルへ出発。20日百田来院。
8月22日	小野田、百田、長野評議員会出席のため出発。25日第式拾参回評議員会後「解散」を決議。
9月24日	宮崎県内務部長来院。26日小野田雪子永眠。10月2日福家篤男永眠。
10月6日	岡山孤児院解散を妻登記所に持参。12日岡山孤児院解散願書を宮崎県知事に提出。
10月13日	柿原来院し、職員、殖民に解散の理由と記念事業の件を報告。14日県社会課長他来院。
10月19日	百田来院。26日百田帰岡。30日百田来院。11月3日病氣療養中の殖民妻永眠。
11月6日	県下賛助員75人への礼状と今後の趣旨書を準備。8日殖民宅より出火母屋と納屋全焼。
12月3日	内務省社会局嘱託早崎八洲他来院調査。5日茶臼原独立教会で感謝祭。
12月6日	天皇陛下病氣御全快祈祷会。11日院母帰院のため長野、江並医師、殖民1人出発。
12月13日	宮崎県知事来院。19日院母帰院。20日長野、大島は自作農創設維持資金の件で県庁へ。
12月21日	クリスマス相談会。24日日曜学校の成績を発表。25日天皇陛下崩御によりクリスマス祝賀会中止。
12月25日	見習生24人来院。新しき村より7人来院1泊。30日柿原より2,000円送付。餅つき。

＜注＞1月1日から4月21日までは茶臼原孤児院『大正十五年度日誌』、5月以後は茶臼原孤児院『大正十五年度五月以後ノ日誌』より作成。

1926年の茶臼原孤児院の職員体制

〈表2〉

	職 種	氏 名	就退職月日
事 務 所	理事(院長)	石井 辰子	
	教 化	小野田鉄彌	
	会 計	長野 米吉	
	庶 務	山本哲二郎	5/17 永眠
	庶 務	壺岐しげ子	8/2 退職
	外務、庶務	末藤 新市	
	外 務	大島 三郎	
	嘱託見習生	西村亀太郎	
	嘱託土地	堀家 利吉	
	活動技師	土居 通秀	1/18 退職
養 育 部	活動技師	山下 英直	1/18就、7月退職
	主 婦	下村 久	4/5 退職
	主 婦	松尾 やす	
	主 婦	石田 ベン	
	院在住者	原田 欽平	(教師)

＜注＞女性氏名は資料により相違あり。  
 (『明治三十九年七月以後職員異動簿』、『岡山孤児院解散理由及び世評集』、『大正十五年度日誌』他より作成)

1926年の院児の内容別人数

〈表3〉

	1 月	2 月	3 月	7 月		12月
家 庭 舎	36人	36人	36人	40人	院内児	32人
見 習 生	65	65	64	70	見習児	50
里子依托	8	8	8		特別保	16
依 托 児	2	2	2	2	委託児	14
自宅救助	3	3	4	4		
合 計	114	114	114	116		112

＜注＞1月から3月は『大正十五年度院児各種統計表』、7月は表2資料、12月は『昭和二十年春石井記念協会史』より作成。特別保は特別保護の略。12月の委託児は里子依托8人、依托児2人、自宅救助4人の計とみる。

部的にも具体化していたことが確認できる。

ただし、院児は、「解散」決議後も表3のように12月まで112人が在籍し、その内訳も院内に在住する院児32人、農業他見習生50人、知的障害児(者)等の保護を要する特別保護16人、里子に委託する幼児14人となり、全体的な人数は「解散」後もほとんど変化をみせなかった。

これらの概況から、1926年は「解散」の年ではあったが、茶臼原孤児院の運営そのものの内容は、劇的には変化せず、その後石井記念協会に引き継がれて行くことが予想できる。これは、「解散」前後いやその後においても、院児が見習生を経て一応独立するまで最低限の援助を実施し、独立できない者は保護を継続して行くとの方針が存在したためとみられるからである。この基本的方針も1926年に確定されるようで、これらを含めた「解散」前後の同院の運営の具体的展開を、先の①から⑤の実態解明を通してまとめてみる。

## (2)「解散」の経過とその理由

### ①「解散」の経過と石井記念協会への引き継ぎ

「解散」の具体的な動きの発端については、前稿で述べたように1924年5月の大原孫三郎評議員の「財政再建」の指示が出発点であったと筆者は理解する<sup>(8)</sup>。そして、「解散」

の「内議」が確認されたのは、1925年5月12日の臨時評議員会の席上であったようである。その事は、岡山孤児院の解散が新聞で報道されたため、1926年7月1日付で財団法人中央社会事業協会が大原孫三郎へ問い合わせた回答の中に次のような文章があったことから判明した。「現理事石井辰子氏並に評議員諸君との間に於て昨年来同院解散の内議相纏□猶も其方法及善後策につき夫々研究中に有之未だ具体策を得て評議員会の正式決議までに立到らず」と述べていたからである<sup>(9)</sup>。つまり、水面下では1925年5月12日から「解散」にむけての「方法及善後策」が大原評議員を中心に検討されていたことになる。

そんな中で1926年8月25日の第貳拾参回評議員会後の臨時評議員会で「解散」が決議されることになったが<sup>(3)</sup>、ここではまず、茶臼原孤児院などでの「解散」にむけての動きを確認し、その後岡山孤児院自身が示した「解散の理由」を紹介してみる。

茶臼原孤児院内での「解散」の布石として注目できるのが、昨年1月から大原評議員の指示で実施してきた静養館を石井記念館に全面改築すると同時に、石井院長の胸像を静養館前庭に建設することであった<sup>(10)</sup>。すでに前者は昨年7月31日に完成し<sup>(10)</sup>、後者は1月30日の石井院長十二周年記念会に合せて29日に除幕式が開催された<sup>(5)</sup>。この除幕式と同記念会を前に、28日には大原評議員夫妻、松本圭一同員、柿原政一郎同員、福家篤男、田崎健作倉敷教会牧師夫妻、鷹津繁義（大原社会問題研究所）が来院し、午後7時から職員、殖民、出身者も参加して恒例のスウプ晩餐会が開催された<sup>(11)</sup>。その席で大原評議員は、「石井君ノ為セシ事ハ随分矛盾セルコト多シ、ソシテ其為シツ、アル仕事ヲ変更スルコトガ神ノ思召デアルト思フテ少シモ躊躇セズ断乎トシテ速時変更、其矛盾スル処ニ石井君ノ活キタル性命偉大ナル処アリ、十二年前ニ死セラレシ当時ノ事ヲ繰返シ受継クノミナレバ石井君ハ十二年前已ニ死シテ仕舞ハレ（シ）モノナリ、今回此ノ胸像ト記念館トカ永久ニ保存サレ是レニヨリ石井君ノ今迄為シ来タル事業精神信仰ヲ多クノ人ニ活カシテ使ヒ益（々）奮励スベキ義務アル」（カッコ内筆者加筆）と述べた。つまり、この大原の講話は、岡山孤児院の解散を職員、殖民、出身者などに正式に発表する場であったと同時に、石井院長の事業を後世にどう伝えるかを説明し、両者の意味と意義を彼らに理解してもらう場となったと理解できる。

そして、29日には、全面改築された静養館前庭での胸像除幕式が小野田鉄彌の司会で実施され、聖書朗読溝手文太郎、挙式之辞小野田鉄彌、所感大原孫三郎、挨拶児島虎次郎等の順序で進められた<sup>(5)</sup>。また、午後6時からの大原評議員夫妻や来賓者との夕食後には、職員、殖民、出身者他による茶話会が開かれ、大原評議員より「見習生預金其他ニ付注意」があり、最後に「院将来ノ方針ニ付協議委員」を選び、第一茶臼原殖民地、第二桜野殖民地、第三柳井迫殖民地より各1人、出身者1人、さらに職員全員が加わって「種々協議」した結果、今後のことは「萬事大原氏ニ委任」することを決定した<sup>(5)</sup>。これは、先のスウプ晩餐会での大原評議員の提案を、職員、殖民、出身者が了解したことを意味し、これで

内部的には「解散」を前提にして、今後茶臼原孤児院他をどう運営して行くかにその課題が移ることになった。

30日には、石井院長十二周年記念会が次のように実施され<sup>(5)</sup>、同日大原夫妻と柿原評議員他が帰途するが、この後の具体的な対応は柿原評議員によって実施されることになる。

開会 司会者溝手文太郎

一、讃美歌 百九十六

一、聖書朗読 松本圭一

一、祈祷 全 人

一、讃美歌 二百六十一

一、記念之辞 小野田鉄彌

一、所感 大原孫三郎

一、 全 田崎健作

一、 全 福家篤男

一、頌栄 四百六十二

一、祝祷 司会者

一、挨拶 児島虎次郎

(茶臼原孤児院『大正十五年度日誌』)

2月5日には、第一殖民地が主催で、近隣の原牟田、百合野、小並の各地区の住民を招待しての交流会(招待会)が実施されたりしたが<sup>(12)</sup>、柿原評議員による「解散」に向けて準備が始まるのは、3月31日に来院して4月3日に第二殖民地へ行き、同殖民地のことを話し合った時あたりからであった<sup>(13)</sup>。これには長野米吉、西村亀太郎、堀家利吉も同行したが、同殖民地を訪れたのは、たぶん同地から松本圭一の募集するブラジル移住希望者が多かったためかもしれない。4月20日にも来院するが、この時の目的は資料が手元になく不明で、8月13日の来院は、翌14日に各殖民と「諸相談する為」で、15日には長野とも「面談」していた<sup>(13)</sup>。8月の来院は、25日の第貳拾参回評議員会とその後の臨時評議員会で提案する決算や「解散」後の茶臼原孤児院と3殖民地をどう処遇するかを見定めるためであったとみる。ただし、その内容までは確認できないのが残念である。

一方、これと並行して「解散」に関する対外的な動きも活発になり、6月15日と17日にそれが新聞報道で表面化する<sup>(14)</sup>。まず6月15日には、帝国農会顧問日本国民高等学校協合理事の山崎延吉が宮崎県耕地課長他の案内で来院し、「二時間に亘って百七十町歩に及ぶ孤児院の用地を田畑山林並に建物に至るまで仔細に検分」する<sup>(14)</sup>。これには宮崎新聞と九州日々新聞の記者が同行して来たため、同新聞に大きく掲載された<sup>(14)</sup>。そしてこの「検分」の目的が、時永宮崎県知事の要請によるもので、「予ねて本県に管理経営方を願出てゐる

茶臼原孤児院の用地一切を利用して此处に日本国民高等学校を建設」するためであったことが公表されたのである<sup>(14)</sup>。つまり、すでに大原評議員が岡山孤児院解散後の処置を宮崎県と協議し、同県に茶臼原孤児院の土地などを「管理経営」してもらう話が具体化し、「日本国民高等学校」の建設まで県側は構想していたのである<sup>(14)</sup>。しかし、結果的には、茶臼原孤児院の宮崎県による「管理経営」の話はすぐに中止となったようだが、6月以前から水面下で同院の宮崎県への移管と「日本国民高等学校」の建設構想が具体化していた事実は注目すべきことであり、このような「方法及善後策」を実施した理由や「中止」に至るまでの具体的経過について今後調査する必要がある。

また、6月17日には、大阪朝日新聞社の島谷鷹一記者が本社よりの指示で来院する一方、同日の同紙と同日の『東京日日新聞』に岡山孤児院解散の記事が同時に掲載され、同院の解散が社会的に公表されることになる<sup>(14)</sup>。両新聞社が「解散」に関する記事を同時に掲載した背景には、関係者が意図的に情報を提供したためとみられ、この時期になぜ「解散」が報道されたかについては、今後考えてみる必要がある。岡山孤児院の解散についての社会的反響を「解散」前に告知しておくことでやわらげるためであったのか。それとも単なる偶然なのか。ただし結果的には大きな反響があり、社会問題化するが、この点についても今後の検討課題とし、その後の動きを見て行くことにする。

そして、8月25日に第貳拾参回評議員会が開催されることになり、茶臼原孤児院からは20日入院した百田孟一と小野田、長野の2人が22日出発し、小野田は石井院母の代理として同評議員会に出席した<sup>(15)</sup>。石井辰子（タツ）院母は理事であったが、4月13日腎臓炎が悪化し臥床してしまい、5月15日には小野田と館野友春の付添で倉敷町の児島虎次郎宅へ移り静養していたため同評議員会には出席できなかった<sup>(16)</sup>。このため茶臼原孤児院を含む岡山孤児院の運営に対する指揮も取れず、全体的な方針は大原評議員の下で柿原が具体化し、岡山事務所の百田と小野田が実際の運営を担っていたとみる。

第貳拾参回評議員会後の臨時評議員会では、病氣静養中の理事石井タツより文書で次の3つの議題が提出され、大原孫三郎、林源十郎、児島虎次郎、柿原政一郎、本山彦一の5人の評議員が出席し、協議がなされた<sup>(3)</sup>。

- 一財団法人岡山孤児院ノ目的タル事業ノ成效ニヨリ之ヲ解散スル件
- 一清算人選人ノ件
- 一本財団ノ残餘財産処分ニ関スル件

（『法人登記申請書』）

その結果は、「財団法人岡山孤児院ハ之ヲ解散スル事」にし「現理事石井タツ、評議員柿原政一郎ヲ清算人ニ推薦スル事」と、「清算終了ノ際ニ於テハ本財団ノ残餘財産ハ之ヲ石井記念協会ニ寄付スル事」を決議した<sup>(3)</sup>。これで、岡山孤児院の解散は確定し、石井院母と柿原によって財産等に関する清算と整理が行なわれ、「残餘財産」は新しく組織され

る石井記念協会に寄付されることになった。「解散」の手続は、9月27日に岡山区裁判所へ登記して終了したが、その「登記簿抄本」は次のようになり、「解散」日を8月25日としていた<sup>(17)</sup>。

登記簿抄本

登記第六号

一、名称 岡山孤児院

一、事務所 岡山市門田屋敷百七拾九番地

一、目的 天下無告ノ孤児ヲ救済シ其ノ父母ニ代

リ之レヲ教養スルヲ以テ目的トス

一、設立許可年月日 明治参拾六年参月拾七日

一、資産ノ総額 金九萬八千四拾七円拾四錢壹厘

一、理事ノ氏名住所

宮崎県児湯郡上江村大字上江貳千四拾四番地 石井タツ

一、解散ノ原因及ヒ年月日

法人ノ目的タル事業ノ成功ニ因リ大正拾五年八月貳五日解散シタリ

大正拾五年九月貳拾七日登記

一、清算人氏名住所

宮崎県児湯郡上江村大字上江村貳千四拾四番地 石井タツ

岡山県岡山市上西川町拾貳番地 柿原政一郎

—以下略—

(『登記簿抄本』)

そして、先のように石井記念協会への財産等の引き継が定められたことで、100人以上の院児が在籍する茶臼原孤児院の運営は、「解散」確定後もこれまでに近いペースで終結にむけての準備を順次進めてゆけることが担保され、そのため12月末現在でも112人もの院児が在籍（表3）できたと筆者は理解する。「解散」即茶臼原孤児院の閉鎖であったら、112人の在籍児は路頭に迷うことになったことは言うまでもない。

10月6日には、岡山事務所より岡山区裁判所に9月27日付で登記した「解散」の書類が送付されたため、同日長野が妻町登記所に持参し「解散」を登記し、12日には「岡山孤児院解散願」を宮崎県知事に提出した<sup>(18)</sup>。これで公的な「解散」手続は終了したようで、翌13日には柿原清算人が来院し、職員と殖民に「解散の理由」と「記念事業」について報告した<sup>(19)</sup>。この時の報告内容は確認できないが、先の臨時評議員会の決議の内容を説明し、石井記念協会が茶臼原孤児院の事業を引き継ぐので直ぐには閉鎖しないことを説明したとみる。そして、「同協会々則（案）」も9月には完成し、財政支援の面でも12月30日柿原より銀行を通して2,000円が送金されて、会計担当が「安心」するなど<sup>(20)</sup>、「解散」後も運営上に急激な変化が生じないよう「方法及善後策」を具体化していたことが確認できる。



そして、ここで注目しておきたいのは、このような「解散」についての筋書を書いたのは誰れかと言うことであるが、それは言うまでもなく大原評議員であり、具体的に実行したのは柿原評議員であったことが、これまでの経過から理解できよう。

## ②「解散」の理由

次に「解散」の理由についてだが、これは先の7月1日付の財団法人中央社会事業協会からの問い合に対する回答（案）としてまとめたものが、それに該当するので次にその部分を紹介する<sup>(9)</sup>。

岡山孤児院解散ヲナサントスル事由ニツキ

### 第一、児童収容申込ノ減少

社会経済生活ノ進歩、茶臼原へ移転セル為、寄付金募集ヲ廃止セル為、孤児院ナルモノ各地ニ出来タル為等々ノ理由ニヨルベキモ其詳細ハ不明也

### 第二、集合教育ノ主義ヲヤメタル結果収容数ノ減少

申込ソノ物ノ減少ニ加エ、院トシテハ経験上集合教育主義ノ弊害ヲ認メテ成ルベク院内ニ収容セザルコト、セル為メ、左院児ハ年々著シク減少セリ

### 第三、依托制度等ニヨル場合モ成ルベク孤児院ト言フガ如キ餘リニ明瞭ナル名称ヲ用ヒザルヲ可トス

集合教育ノ一餘弊トシテ「孤児院出身者」又ハ「孤児」ナド、呼ビナサシテ終生社会的圧迫、精神的苦痛ニ悩ムモノ頗ル多シ、前項ノ如ク成ルヘク院内ニ収容セズ、之ヲ夫々ノ家庭ニ吸収セシメ、相当ノ救助ナス場合モ、其児童終生ノ幸福ノ為、「孤児院ノ援助」等ト銘打タル、コトハ寧ル迷惑ヲ感ズル場合多シ、

### 第四、岡山孤児院寄付行為ノ条文ガ目的変更ヲ許サルコト

(『岡山孤児院解散理由及び世評集』)

このように「解散」の「事由」を4点ほど掲げているが、その「第一」は同院の社会的役割の低下を最大の理由に掲げ、また「第二」と「第三」では約40年間の同院の養護実践の総括としての致達点と問題点を「解散」の理由に上げていることに注目しておく必要がある。ただそれ以上の考察は今後の検討課題とし、今回は岡山孤児院側の解散の理由のみ示しておく。なお、この「回答（案）」を作成する中で「茶臼原天倉財団（新設）」を構想し、「解散」後の茶臼原孤児院の事業を引き継ぐ「事業内容」（在籍児規模）、「活動期間」、「財政的裏付」を次のように検討されていたことも付記しておく<sup>(9)</sup>。つまり、これらの「事業内容」他が石井記念協会に引き継がれ、その結果「解散」後も院児たちが一応独立するまで事業を継続する最初の構想がこれであったと判断するからである。

茶臼原天倉財団（新設）

一、院内児童 三十人（平均四年間直接保護⑩十円 年三、六〇〇）

二、特別保護者（身心欠陥） 十人（永久ニ直接保護ヲ要ス④十円 年一、二〇〇）

三、見習生 七十人当分間接保護ヲ要ス 年額五〇〇円

四、委託及自宅救助 五人（平均五ヶ年直接保護④十二円 年七二〇）

○存立期限十ヶ年 め六、〇二〇

○財産

- 茶臼原ノ内原無田川以北全部ノ土地建物
- 残余財産帰属

○設立者ヨリ (同上)

このように、岡山孤児院の解散は大原評議員の指導で実施され、茶臼原孤児院を含む岡山孤児院の事業は石井記念協会に引き継がれ、残った院児の一応の独立を見定める体制が整ったため、内部的には大きな混乱が生じなかったようである。そして、石井記念協会は1927（昭和2）年4月1日に発足するので<sup>(21)</sup>、8月25日の「解散」から翌年3月31日までは「引き継」期間であったことになる。

### (3) 事務所と「解散」への準備

そこで次は、先のように「解散」が確定する中での事務所の運営とその展開を見てみると、昨年より引き続き茶臼原孤児院の運営の中核として多様な役割を分担していた。つまり①各種補助金を含む財政関係を担当する会計と、在籍児の戸籍謄本の整理や対外的な窓口業務を実施している庶務の仕事、②各地を巡回しての賛助金募集の仕事、③慈善講演会の開催による収益事業、④農業見習生他への巡回や監督の仕事などで、①と④は「解散」後も継続していた。これを実施する事務所の職員体制は表2のように10人体制から8人体制前後に減少するが、主婦を除く全ての職員が所属していた。そこで、先の①から④の順序で各職員ごとに仕事の内容を見て行くと、石井辰子院母は前述したよう理事として岡山孤児院全体の運営に責任を持つ立場にあったが、実質的な責任者は大原評議員であり、かつ4月13日から病気が悪化して倉敷町で静養をよぎなくされたため<sup>(16)</sup>、茶臼原孤児院の運営にも十分関わらず、これに代って小野田鉄彌が牧師の仕事を兼任しながら第貳拾参回評議員会に出席するなどして、この時期の同院の運営を中心的に支えたと理解する。また、会計は長野米吉が引き続き担当し、補助金や賛助金などの経理を含む同院の財政運営にあっていたが、そのうち補助金については2月17日に宮崎県知事より「十四年度茶園設置奨励金」104円が小切手で送金されていた<sup>(22)</sup>。これは原田歆平前小学校長が茶業組合長となり第一殖民と組合を作って実施したもので、3月29日には先の奨励金他で高鍋駅前の中武恒次より茶種子3石（5斗入6俵）を購入していた<sup>(22)</sup>。また、同日の第二回茶園品評会では1等賞を授賞したりと<sup>(22)</sup>、茶臼原孤児院の財源確保や殖民の現金収入に道を開くための事業になっていた。

2月25日には、すでに申請していた慶福会からの造林事業への事業助成1,000円の下付決定が児湯郡役所より通知され、3月14日に1,000円の小切手が届いたため、この助成金で翌15日から長野、西村亀太郎、堀家利吉の3人が島之内他より松苗5万本を購入した<sup>(23)</sup>。そして、31日から松苗の植林を実施したが<sup>(23)</sup>、これも将来に亘る永続的な財源確保のために実施したもので、実際の植林は西村と堀家が担当したとみる。

3月1日には岡山県庁より御下賜金1,000円と奨励金800円の下付決定通知が送付される<sup>(24)</sup>。いずれも岡山県を通してのものであったため岡山事務所より送金されて来たが<sup>(24)</sup>、これらは昨年度に引き続き下賜（付）されたもので、茶臼原孤児院の主要な財源として活用された。つまり、1926年の同院の財源に占る各種の補助金等の金額は計2,904円（48.8%）に達し、最も重要な財源となっていたのである<sup>(25)</sup>。

戸籍謄本の整理を含む庶務関係の仕事は引き続き山本哲二郎が担当し、昨年6月からは壱岐しげ子も手伝い<sup>(26)</sup>、各地の官民からの問い合わせや出身者の手紙などへ返答し、さらに山本は毎日の院務の状況を『大正十五年度日誌』に記入し、毎週『週報』を発行しながら毎月の院児の状況を『大正十五年度院児各種統計表』として作成していた<sup>(27)</sup>。しかし、その山本が持病を悪化させ4月21日以降休職し、庶務担当が1人欠員となったが、事務所の運営上庶務担当を欠くことができず、このため賛助金募集担当の末藤新市が山本の後任になったのであった<sup>(28)</sup>。そして、山本は5月16日に妻町の木下医院に入院したが翌17日永眠してしまった<sup>(29)</sup>。18日には義父の林源十郎評議員が来院し、19日に葬儀が実施され、葬儀後の23日には山本下枝夫人が倉敷町の林評議員宅へ帰郷した<sup>(29)</sup>。山本永眠後は、末藤と壱岐が庶務担当であったが、その壱岐も8月2日に郡是製糸会社宮崎部に移り退職し、その後は末藤が1人で庶務の仕事を実施した<sup>(30)</sup>。

次に、賛助金募集（外務）の仕事は引き続き末藤が担当し、表4左上のように賛助金の集金活動が中心で、正月も集金活動を行い本庄町などを巡回し、2月は穂北方面や妻町でも集金していた。3月27日からは鹿児島市での集金活動に出発し、4月中旬には加治木町にも出向いたが、19日に都城市で集金して帰院した。実は、これで末藤による賛助金募集活動は中止となり、前述したように山本の病気の悪化と永眠にともない庶務の仕事に異動することになる。つまり、「財政再建」のため1924年7月から再開した賛助金募集活動も、4月19日で中止となり、その中止の直接的要因は山本の病気にともなう末藤の庶務への異動であったが、その根本的要因はすでに「解散」を前提とした準備が進められ、「財政再建」のための賛助金募集より「解散」準備のための庶務の仕事を優先させる必要があったからと理解する。それでも1926年の賛助金収入は979円75銭で全歳入の16.4%を占め、財源として重要な役割を果たしていたことに変わりなかった<sup>(25)</sup>。

一方、慈善講演会は、表4左下からのようにやはり大島が正月も精力的に活動して1月16日に帰院するが、18日には活動写真技手の土居通秀が退職し、その後任として山下英直

1926年の賛助金募集と慈善講演会活動の状況

〈表4〉

末藤新市の賛助金募集活動		大島三郎他の慈善講演会活動	
1/12	末藤へ臨時寄付金領収書を送付	1/24	大島より七野、田野、櫛で136円と連絡あり
1/14	末藤帰院、50円持参	2/11	大島より広瀬村20日、21日に開催確定等連絡あり
1/24	本庄其他集金より末藤帰院し102円持参	2/18	大島より20日、21日広瀬、22日住吉校、24日中村校で開催確定。その後青島方面へ行くと連絡あり
2/11	穂北方面集金より末藤帰院し30円持参	2/19	住吉小学校より22日開催を希望と通知あり
2/28	末藤より妻町の火災へ見舞文送付依頼あり	2/26	青島村より婦人会との協議が一致せず、開催を中止すると連絡あり
3/16	末藤より140円受け取る	3/11	大島より深見和彦と年長兄の進路について相談したところ、産婆学校等を紹介と連絡あり
3/22	末藤院の代表で西村信敦の葬儀に出席	3/27	鹿児島県庁よりの慈善講演会開催許可と県下小学校への紹介状を持参し大島帰院
3/27	末藤鹿児島市へ賛助金集金に出発	4/14	大島より18日開催のため山下の来院を求める
3/30	末藤より鹿児島市西千石町に無事着と連絡あり	4/15	大島より志布志町の関係者に協力依頼と連絡あり
4/5	末藤より30円送付。7日石井略伝送付依頼あり	4/18	大島より志布志町の5小学校で開催と連絡あり
4/8	末藤へ週報送付。12日宮崎駅慈善函鍵送付	4/19	大島へ各警察署への願書と石井略伝を送付
4/12	末藤より加治木町に行き近日中帰院と通知あり	4/20	大島へ週報送付。5/3大島一時帰院
4/16	末藤より鍵入手、17日まで滞在と通知あり	5/4	大島出発。5/10大島はできものができ帰院
4/19	末藤より鹿児島駅出発、都城市下車集金と連絡	5/28	志布志町の協力者に礼状発送
4/19	末藤帰院	6/9	大島加治木町へ出発。
大島三郎他の慈善講演会活動		6/29	大島慈善会での小野田の講演依頼のため帰院
1/16	大島帰院、18日、19日田野村、21日櫛村、23日、25日、26日清武村で開催決定	7/4	小野田慈善講演のため鹿児島市へ出発
1/18	土居辞職し、後任に山下英直就職	7/12	大島鹿児島市より帰院し、14日関係者に礼状出す
1/20	田野村大島より18日七野小学校、20日田野、21日櫛村、23日清武、25日黒板、26日大久保で開催他連絡あり		

(表1 資料と同様)

が就職する<sup>(5)</sup>。その後は、田野村、清武町、櫛村などで開催し、2月は広瀬村から青島村付近で実施した。3月も宮崎市付近で活動していたようで、この時は深見和彦県属に年長兄の進路を相談し、県立病院や赤十字病院などと交渉して「赤十字看護婦又ハ産婆両学校」への受験を可能にするような活動も実施していた<sup>(31)</sup>。

そして、4月からは鹿児島県内での活動を実施するため、同県知事宛に「慈善講演活動写真開催ニ対スル免税申請願」を提出し、27日それが許可され大島が持参した<sup>(32)</sup>。そこには、上映する「犬馬之助力、陸前石之巻全景一卷、岡山孤児院茶臼原孤児院実況二巻、犠牲之光」に対する検閲済証と県学務課よりの県下各小学校への紹介書が含まれ、前者からは当時上映した活動写真の内容が確認でき、「茶臼原孤児院実況」が入っていたことに注目しておく必要がある<sup>(32)</sup>。鹿児島県内では、7月12日まで志布志町、加治木町、鹿児島市などで開催したようで、これで慈善講演会活動も中止となるが、この「中止」の直接的要因は、6月17日に東京朝日新聞等で「解散」が報道されたりしたためとみられ<sup>(14)</sup>、根本的には先のようにすでに「解散」準備に入っていたため、同会もそろそろ中止しなければならない時期にあったためとみる。また、1926年の同会の収入は119円83銭(2.0%)と少なかった点<sup>(25)</sup>も要因の1つかもしいない。

そして、同会の活動中止後の大島は、西村亀太郎が担当していた見習生の仕事を手伝ったり、12月19日には殖民の自作農創設維持資金低利貸付の件で長野と宮崎県庁に出張し、さらに21日からはクリスマス祝賀会について長野や殖民たちと相談会を開き、その準備にもあたっていたことが確認できる<sup>(33)</sup>。なお、山下は慈善講演会活動の中止と共に退職したとみる。

近隣農家他で働く見習生の指導と監督は、西村が嘱託で担当し、新見習生の委託や無断で帰院する見習生への対応と再委託などを実施し、8月中は病気で1ヶ月休養していたようである<sup>(34)</sup>。ただし、これだけでは西村の活動を十分確認したとはいえない。なぜならば表3で示したように見習生は7月に70人に達して在籍児の60.3%を占めるなど、茶臼原孤児院の業務として最も重要な仕事の1つで、また

見習生の市町村別人数

〈表5〉

	1月	2月	3月	12月
新田村	6人	6人	6人	7人
富田村	10	9	9	9
上穂北村	9	10	10	11
川南村	3	1	1	1
妻町	3	2	2	2
木城村	1	1	1	1
大宮村	3	—	上江村	1
憶村	6	7	7	5
宮崎市	3	10	9	9
高鍋町	2	1	1	1
県外	13	13	12	13
院内	6	5	6	2
合計	65	65	64	62

(『大正十五年度院児各種統計表』、『大正十五年度院児名簿』より作成)

「解散」を前提にするならば、見習生の独立(退院)が最優先の課題であったからである。そして12月末には見習生が50人に減少し、「独立」が進んだように見えるが、これは特別保護の中に知的障害他を持つ見習生を分離したため<sup>(35)</sup>、実質的にはその人数に変化がなく、「解散」後の12月末の時点でも「解散」という理由で見習生を強制的に退院させるという手段は取らず、むしろ1927年からそれを加速させていくことが予想できる。なお、12月末の時点での見習生の市町村別状況は表5のようになり、10市町村他に62人おり、県外が最も多く、次が上穂北村、富田村、宮崎市で、院内にも2人ほど帰っていた。

さらに、茶臼原孤児院の土地管理の嘱託として堀家利吉が再就職するが、たぶん3月25日に長野、西村と慶福会の助成金受領にともなう松苗の買い付のために島之内、宮崎市方面へ出張したあたりから嘱託になったとみる<sup>(36)</sup>。4月3日にはやはり長野、西村と、柿原に同行して第二殖民地に行き土地の件について話し合っていた<sup>(36)</sup>。5月23日にも上江村字平原の内野百次と院有地の図面の件で話し合い、7月17日には上穂北村字中洲の松尾□五郎が所有する畑と院の畑の番号の件で来院したため、堀家が面談して番号の相違を「承諾」していた<sup>(36)</sup>。そして8月23日の宮崎県庁耕地整理課の測量にも立会っていた<sup>(36)</sup>。

以上が、事務所の職員別の仕事の内容と役割分担で、院内での院児の養育と教育を除く全ての業務が集中し、「解散」への準備と「解散」後の運営を一手に担っていたことが理解できる。

## (4) 養育部と2家庭舎体制への収束

養育部は、男子2家庭舎、女子1家庭舎、計3家庭舎体制まで減少し、主婦も表2のように下村久、松尾やす、石田べんの3人体制となるが、1926年はそれがさらに減少することになる。つまり、下村主婦が4月5日で退職したため、すでに同主婦は3月26日に下村家から荷物を整理し京都館に移り、このため31日には、松尾家の8人が第一助成館から旧下村家(10人)に移って合流し、院児18人(1人失踪中)で新松尾家が誕生する<sup>(37)</sup>。そして、4月4日には、下村主婦の送別会のため同家出身の付近の見習生、出身者に案内を出し、職員、殖民など50余人が集り送別会が開催された<sup>(37)</sup>。同会では、女性職員を代表して石井院母が、男性職員を代表して小野田牧師が、さらに殖民代表からも「送別ノ辞」があり、小野田牧師と長野からは感謝状などが贈られ、最後に下村主婦の挨拶で散会したが大盛会のうちに終了した<sup>(37)</sup>。そして、翌5日職員、殖民、下村家の子どもたちに見送られ帰郷し、1891(明治24)年2月の就職から途中9年10ヶ月除く、25年11ヶ月間の岡山孤児院での職員(主婦)としての生活に別れを告げたのである<sup>(37)</sup>。

このため、3月末からの養育部は男子部松尾家17人、女子部石田家15人、他壱岐家2人、院内2人と、男女各1家庭舎体制となり<sup>(38)</sup>、「解散」後の12月末まで2家庭舎体制が続いた。養育部の院児の年齢別人数は3月末現在では表6のようになり、12歳以上の院児が多く、養育面ではあまり手がかからなく、近い将来見習生に移行できる者が多かったことに注目しておきたい。

また、この他に一昨年7月から積極的に取り組んできた協力者などの一般家庭への院児の里親依托は、8人と昨年と同様のようで、県立慎修学校への依托児も2人と変化がなかったが、自宅救助児は1人増加し、4人になっていた<sup>(39)</sup>。つまり、1月5日に大牟田市の元主婦下川セツ他から乳児の救助依頼があり、調査検討の結果3月1日自宅救助を決定し、25日から毎月10円を養育料として下川に送付し、下川の監督のもとで母親が養育することにした<sup>(39)</sup>。すでに「解散」が確定する中でも、救助を必要とする乳児には自宅救助という方式で救済していたことは見逃せない事実と言えよう。ただし、院の今後の養育方針として積極的に押し進めてきた一般家庭への里子依托が増加しなかったのは、「解散」により余裕がなかったためであろうか。

家庭舎在住児の  
年齢別人数 〈表6〉

	男子	女子	計
2歳	1人	—	1人
8歳	1	—	1
9歳	1	2	3
10歳	2	2	4
11歳	3	2	5
12歳	3	1	4
13歳	2	2	4
14歳	3	6	9
15歳	1	—	1
16歳	1	—	1
18歳	1	—	1
20歳	—	1	1
30歳	1	—	1
合計	20	16	36

(『大正十五年度院児各種統計表』より作成)

学年別院児数 〈表7〉

	1月	2月	3月
1学年	2人	2人	—人
2学年	6	6	2
3学年	2	2	6
4学年	6	6	2
5学年	9	9	6
6学年	3	3	9
合計	28	28	25

(表6資料と同様)

そして、院児の教育は、昨年4月から木城尋常小学校へ通学し、3月16日には同小学校より4人の院児の成績について相談があり、「若シ出頭ナキトキハ落第ノ取扱」をするとの通知があったりもしていた<sup>(40)</sup>。また、同小学校在学児の学年別人数は表7のようになり、3月末からは卒業と進級により1学年が不在で、全体でも25人に減少していたことが確認できる。

### (5) 殖民とブラジル移住の動向

#### ① ブラジル移住の動向

院児から独立し茶臼原で農業を営む殖民は、1926年1月末の時点で表8左のように、第一茶臼原殖民地は18戸（長野、大島を入れると20戸）と昨年末に1戸増加し、第二檜野殖民地は12戸、第三柳井迫殖民地は6戸で計36戸あった。殖民は、言うまでもなく岡山孤児院の養護実践の到達点であり、さらに小作から自作農へ発展する出発点でもあった。その殖民が、昨年11月26日に松本圭一評議員（以下松本と略）が来院してブラジル視察報告と移住奨励を行ったため、多くの殖民が松本と一緒にブラジルへ移住するか、それとも茶臼原に残るかの選択を迫られていたとみる<sup>(41)</sup>。これは、まさに「茶臼原農村」のもう一方のパートナー、いや岡山孤児院の解散という状況下では、「同農村」の中核となる

3 殖民地他の戸数、人口の推移 〈表8〉

	1 月		2 月		3 月	
	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口
第一茶臼原殖民地	18戸	97人	18戸	97人	18戸	97人
第二檜野殖民地	12	36	12	36	9	24
第三柳井迫殖民地	6	29	6	29	6	25
合 計	36	162	36	162	33	146
宮 崎 県 内	23	63	23	63	23	63

(表6資料と同様)

ブラジル移住に関する動向 〈表9〉

	事 項
1/13	出身者よりブラジル行を希望する手紙あり
1/14	朝鮮在住出身者姉からブラジル行希望の依頼
2/18	見習生が松本の家族としてブラジル行くことについての依頼文書と旅費を持参
2/18	院母後見人の印を押して文書を松本へ送付
2/18	高橋善導来院、職員との晩餐会でブラジル行を話し、懇談する
3/1	鹿児島県加治木町役場より壱岐とし子の膳本着。高橋宮崎県庁へ
3/3	福岡県戸畑市の出身者よりブラジル行通知あり
3/3	高橋ブラジル行を高鍋警察署へ報告
3/4	高橋ブラジル行を妻警察署へ報告後出発し、戸畑市で出身者と合流
3/5	見習生ブラジル行のため宮崎市より帰院
3/7	松本へ見習生の旅券下付願他送付。また、岡山県江辺村へ身分証明願送付を依頼
3/11	殖民一家ブラジル行により関門館へ移転
3/12	江辺村役場より膳本等を松本に送付と連絡あり
3/14	高橋ブラジル行の件で再度来院
3/15	高橋ブラジル行の見習生を伴い帰岡
3/16	福岡市の石賀よりブラジル行の者に洋服が必要であれば送付するとの問い合わせあり
3/17	高橋より殖民2家族に23日出発するように等の伝言の依頼あり
3/19	壱岐姉より見習生は松本夫人と一緒に神戸へ行き、24日全員ブラジルへ出発するとの話あり
3/22	殖民一家ブラジル行のため神戸へ出発
3/24	殖民一家ブラジル行のため高鍋へ出発
3/25	高橋よりブラジル行の記念樹としてコノ椎を静養館裏山に植へることの依頼あり
3/28	高橋夫妻、壱岐とし子、見習生はブラジル行挨拶のため来院、29日高橋夫妻出発
3/29	殖民より4月1日はわい丸で神戸出帆と連絡あり
3/31	殖民より4月1日はわい丸で神戸出帆と連絡あり
4/5	殖民より長崎港着、香港へ出発と通知あり
4/10	殖民に高橋よりの書留を預っていると通知
4/14	京都館でブラジル行8人(家族)の送別会
4/15	殖民ブラジル行で出発。6/11出身者神戸より礼状
7/31	ブラジル着の出身者より石田弁子に礼状着
8/18	殖民一家ブラジル行のため出発
9/10	ブラジル在高橋より旧殖民三男赤痢で永眠他の通信あり

(表1資料と同様)

べき36戸の殖民が分散しかねない現実が進行中であったと理解すべきである。そして、1926年はその現実が一部具体化し、7戸の殖民がブラジル移住を開始することになる。その動向をまとめると表9のようになり、ブラジル移住の呼びかけに対し、殖民、見習生、さらに各地の出身者がそれに呼応する動きが起るのである。まず1月13日と14日に出身者からの問い合わせがあり、前者は東京市在住の出身者で、ブラジル行に「御同意下サイソシテ松本先生ニよくお話シテ下サイ」との依頼で、これに対し「至極よろしき事ニテ松本先生ニモ話」すと壱岐姉より回答していた<sup>(42)</sup>。後者は朝鮮在住の出身者の姉からで、弟が「去年五月通進通生ニ受験セシモ不合格」のため、ブラジル行の一行に加わりたという問い合わせで、これに対しては「今回ブラジル行ハ院ノ企ニテアラス松本圭一氏ノ為シ居ラル、事業ニテ非常ニ身体ノ強壮ナル夫婦者ナルコト。先発隊トテ已ニ移住者ハ決定致セルコト松本氏ニ御話アルモ夫ハ六ヶ敷」いと回答した<sup>(42)</sup>。この出身者への2つの回答で注目したいのは、茶臼原孤児院のブラジル移住に対する対応や態度の一端が理解できる点である。つまり、出身者からの問い合わせに対して前者では、「至極よろしき事」とブラジル移住を奨励すると同時に松本への口添も了解し、積極的な対応を取っていた<sup>(42)</sup>。しかし、後者では「六ヶ敷」いと回答した点で、これは出身者の力量を客観的に判断して「移住」の可否を個別に決めたためとみられ、その意味でこの対応は公平かつ冷静なものと理解できよう。ただ、ブラジル移住に対する態度は、「松本圭一氏」の「事業ニテ非常ニ身体ノ強壮ナル夫婦」が対象と、茶臼原孤児院は直接関係しないことを明言し<sup>(42)</sup>、一線を画する態度を鮮明にしていたのである。

そして、殖民や見習生のブラジル移住が具体化するのには、2月18日に元農場学校教師の高橋善導がたぶん岩手県黒沢尻実科高等女学校を退職して来院し、彼が移住手続他に着手した時からとみる<sup>(43)</sup>。高橋は、松本と連絡を取りながら3月下旬までに計3回来院して各種の手続を進めたようで、22日には第二樫野殖民地の一家がブラジル移住のため神戸市へ出発した。また、24日にも同殖民地の別の一家も出発し、この2家族は4月1日神戸港から「はわい丸」でブラジルに向けて出港した。さらに14日には、ブラジル行の8人（5家族3人）の送別会が実施され、翌15日から出発したが、その内訳は、第一茶臼原殖民地1家族、第二樫野殖民地1家族、第三柳井迫殖民地3家族、見習生男子1人、同女子1人、壱岐しげ子の妹とし子で、第二殖民地の一家は6月1日に出産があったためか8月18日に出発していた<sup>(44)</sup>。7月31日には、4月1日に神戸港から出発していた殖民の妻より石田主婦宛に、「安着シ又至極結構なる土地」との礼状が届いていた<sup>(45)</sup>。また、9月10日には高橋よりブラジル到着後の近況が報告され、殖民の三男が「赤痢病ニテ永眠せ里キリスト教式葬儀執行せ里尚全病ニ付オトナ子供共五六名赤痢病罹りしも他ハ全服せり」との厳しい現実が伝えられた<sup>(46)</sup>。

このように、7戸の殖民他がブラジル移住したことにより各殖民地の戸数が減少したが、



もう一方で1月と3月に第一茶臼原殖民地に独立者が1人、第三柳井迫殖民地には2人が入植して来たため、戸数としての減少は少なかった<sup>(47)</sup>。このため第一同殖民地は18戸、第二同殖民地は9戸、第三同殖民地は6戸、計33戸となり、これらの殖民と「解散」後を引き継いだ石井記念協会が「茶臼原農村」の構成員となって行くことになる。

なお、このブラジル移住を推進した松本の意図や参加した殖民の目的については、手元に資料がなく今後の研究課題とするが、ただそこでの解明のポイントはこの「移住」が、石井院長が目指しその後も創り続けた「茶臼原農村」の理想を、広大な土地を有する海外とりわけブラジルでどのように継承しようとするものであったという点に収斂して検証して行く必要があることだけ指摘しておきたい。

## ② 殖民と自作農創設維持資金

そして、先の「移住」に行かなかった殖民の動きとして注目できるのが、5月27日頃に宮崎県に提出したとみられる自作農創設維持資金の申込で<sup>(48)</sup>、これは殖民が小作から自作農に移行するための低利融資制度の活用であり、殖民が自作農を目指す具体的な一歩となる可能性があるからである。つまり、殖民は茶臼原孤児院他から農地を借用し、小作としては独立していたが、いまだ自作農には移行しておらず、茶臼原孤児院とは地主小作関係にあった。それを国の自作農創設維持資金を借りて自作農に転身しようとする試みで、これは石井院長が目指した殖民が自作農となり「三代教育」の基盤をつくり「茶臼原農村」を里親村に発展させるという構想<sup>(49)</sup>にもう一歩近づく動きと理解できるからである。

この「申込」に加わったのは第一と第三の殖民18戸で、その融資対象の土地（田畑）と融資希望金額は表10のようになり、平均1,288円28銭であった<sup>(48)</sup>。6月15日には、県庁より林耕地整理課長と深見和彦他1人が土地視察のため来院し、宮崎新聞記者他も同乗して来た<sup>(50)</sup>。8月4日には「本県知事承諾之上」林耕地整理課長が土地測量で来院したいとの通知があり、23日から宮崎税務所員などが、堀家の立合で測量を実施した<sup>(50)</sup>。9月3日からは県耕地整理課の職員が来院して測量が行なわれ、12月24日には長野と大島がこの件

自作農創設維持資金の  
融資希望殖民 〈表10〉

		融資農地	融資希望金額
第一茶臼原殖民地	A	田 4反721	1,200円
	H	田 7. 313	1,500
	H	田 2. 218	600
		畑 . 411	
	S	田 6. 103	1,500
	Y	田 4. 617	1,150
	K	田 4. 807	925
	K	田 8. 323	1,474
	I	田 4. 402	990
	I	田 6. 711	1,500
	B	田 2. 518	1,100
		畑 5. 215	
	M	田 7. 027	1,470
	O	田 6. 606	1,110
第三柳井迫	H	田 6. 410	1,490
	N	田 6. 527	1,200
	S	田 4. 928	1,500
	E	田 8. 303	2,000
	A	田 3. 902	1,400
	H	田 3. 605	1,080

〈注〉第三柳井迫は第三柳井迫殖民地の略。アルファベットは殖民のイニシャル。

(『大正十五年五月廿七日自作農創設維持資金申込表』より作成)

で宮崎県庁に出張したが、いまだ融資の可否についての決定は出なかった<sup>(50)</sup>。

それでも、この時期に多くの殖民が自作農創設維持資金を申込だのは、前者のブラジル移住の影響と「解散」に対する暗黙の圧力があったからとみる。特に前者は、殖民が「移住」後広大な土地を耕作する大地主になることを夢見ていたとみられ、「茶臼原農村」に残る殖民にとってもいつまでも小作でいることは、心理的にも現実的にも納得がいかなかったと推測する。ただし、それが実現可能なことであったかどうかは1927年以後の問題となる。

このように1926年の各殖民は、「解散」と「移住」に揺れながら、それぞれがその方向を定めて行くことになり、「茶臼原農村」も大きく動揺していたと理解できる。そんな中にあっても茶臼原独立教会の礼拝は開催され、日曜学校も実施されていたようで、「基督教農村」は継続していた。2月8日に木城村役場に報告した1925年度の「信徒数」は男性147人、女性106人、計253人<sup>(51)</sup>と「茶臼原農村」の大半の人々がキリスト教を信仰していたことに変わりなく、礼拝と日曜学校はそれらの人々の精神的支柱であった。そして、礼

礼拝開催日と小野田牧師の説教内容〈表11〉

	開催日と説教の内容他
1月	17日、24日、31日(小野田牧師不在ニ付休)
2月	7日(馬太伝六章十二節「すべて人ニせられりと思ふ事は人にもその如くせよ」トノコトニ付話サル)、14日(ルカ伝七章一節ヨリ十節マテ十七章五節ヨリ十節マテニ付説教)、21日、28日(詩篇百〇四篇三十四節エホバをおもふわが思念ハたのしみ深らんニ付説教)
3月	7日、14日、21日、28日(基督の教訓天国から運ばん種ニ付説教)
4月	4日、11日、18日。5月2日(馬太伝一章ノ二九より三五)
6月	6日、13日、20日。7月11日、18日、25日
8月	1日、15日、22日。〔9月なし〕
10月	3日(久々振当教会ニテ朝の礼拝を集会) 24日(久々振牧師の礼拝説教あるか人数集りある)
11月	7日(久々振礼拝説教ありマルコ伝六章一より六〇迄朗読しキリスト教信者ト愛国トノカンケイ)
12月	12日(説教アル集会者約男女十五六名)

〈注〉〔 〕内は筆者加筆。(表1資料と同様)

拝は従来通り小野田牧師が担当し毎週日曜日に開催していたとみられるが、手元の資料では表11のように年間28回ほどの開催しか確認できなかった。これが実際の開催数だとすると、先の「解散」と「移住」の影響で「茶臼原農村」の精神的支柱も揺らいでいたと言えるかもしれない。さらに日曜学校の実施状況になると、手元の資料からは2月7日の開催しか確認できなくなる<sup>(51)</sup>。ただ、3月31日には、日曜学校の教師であった小野田勇(小野田牧師の息子)の送別会が同校生徒によって開催され、夜にも同校教師等による会食があり<sup>(51)</sup>、日曜学校も継続されていたとみる。なお、小野田勇は、熊本県菊池郡合志村の松田喜一方へ働きに出たため、送別会他が実施されたのである<sup>(51)</sup>。

「茶臼原農村」でのその他のキリスト教関係の行事等の実施状況をみると、2月5日に第一茶臼原殖民地の人々が近

隣原牟田 (38人)、百合野 (11人)、小並 (12人) の3地区の61人に案内状を出し招待会を開催していた<sup>(12)</sup>。午後6時から静養館に約60余人ほどが集り、会食後堀家が挨拶、小野田牧師からは「茶臼原孤児院ノ起源及日米両国民ノ精神労働状態ヨリ現時ノ事態」についての話があり、「我々一同非常ノ勇氣忍耐ヲ以テ奮励」あるべしと述べられた<sup>(12)</sup>。最後には堀家が「是ヲ機トシ<sup>(9)</sup>後各子供達日曜学校ニ来ラル様希望」が述べられ散解していた<sup>(12)</sup>。

また、3月22日には、鉄道青年会で益富政助と一緒に働いている戸塚建平が来院し、京都館で「ローマ書八章十六十七ベテロ前書四章十一十二十三」についての説教があった<sup>(52)</sup>。そして、11月8日には殖民宅が全焼する火災に見舞われたが、関係者の協力で復旧でき、12月5日には恒例の感謝祭が実施され、「壺ケ年間農作物」の収穫と「家庭安全」に感謝して、粃25俵、野菜、金8円が供えられ、夜の会食後はクリスマスの相談会と天皇陛下御病気の全快を祈って祈祷会を開くことを定めた<sup>(53)</sup>。また、感謝祭で提供された粃25俵は茶臼原独立教会の仮倉庫に納められ、同教会費になったようで、感謝祭は茶臼原独立教会の費用を捻出する役目も果していた<sup>(53)</sup>。21日のクリスマス相談会は大島宅で開かれ、長野、堀家他4人で検討した結果、「余興」は天皇陛下が御病気のため中止し、日曜学校生徒へ菓子を配付するため300袋購入することを決めた<sup>(53)</sup>。24日には、京都館で日曜学校生徒の「成席表<sup>ママ</sup>」の準備を石田主婦、小野田健一、大島英雄が、お菓子の袋詰を長野、大島、末藤が実施し、25日午前10時より礼拝式を執行したが、天皇陛下崩御の知らせで中止し、遙拝式に切替えた<sup>(53)</sup>。

このように、3殖民地を含む「茶臼原農村」も、「解散」と「移住」に揺れた1年であったが、「解散」後は石井記念協会に引き継がれる方向が定まり、「移住」を選択した殖民もいたが、新に殖民として入植する者もあり、全体的には大きく変化しつつあったが、「同農村」としての実質的な変化はいまだ大きくなく、「基督教的農村」としても機能していたことが理解できる。

#### (6) 百田孟一と岡山事務所の役割

岡山事務所（本部）は、すでにその役割が希薄化し、存在そのものが問われる状態にあったとみるが、1926年は「解散」の具体化の中で一定の役割を果たしていたことが確認できる。それを担ったのは、同所の唯一の職員である百田孟一で、表12のように茶臼原孤児院に年間9回も来院して100日以上滞在したのである。1月から2月の来院は、大原評議員の指示で昨年からの実施していた石井記念館と石井院長の胸像除幕式の準備と式典開催のためであった。また6月10日の宮崎県耕地整理課長他を百田が案内したのは、殖民の自作農創設維持資金の申請に関わるものであったと同時に<sup>(16)</sup>、6月15日に帝国農会顧問の山崎延吉が来院して宮崎県へ移管する予定の茶臼原孤児院用地視察を準備するための案内で

あったとみる<sup>(14)</sup>。その経過はすでに記したが、百田が「視察」準備の案内をしたとすれば、大原評議員の指示を受けての「本部」としての仕事として実施したと判断できよう。

さらに、8月4日には県耕地整理課長より百田宛に「県知事承諾之上当地の測量」依頼文書が送付されるが<sup>(50)</sup>、これは百田が先の2つの件の責任者として「解散」前後の実務を担っていたためとの見方もできる。また、16日に一度帰岡し、20日再度来院、小野田、長野と第貳拾参回評議員会の準備をして、3人で大阪市の財団法人石井記念愛染園に出発するが<sup>(15)</sup>、これも大原評議員の指示

で第貳拾参回評議員会の準備を百田が中心となり実施したためと見る。8月25日の同会後「解散」が決議され、その後岡山区裁判所へ「解散」登記を行ったが<sup>(17)</sup>、これも百田と柿原清算人が担当したとみる。

そして、10月30日の来院は、「記念石」の発見のためで、これもやはり大原評議員の命で石井記念館などの記念碑用の石を見つけるためとみられ、11月13日に木城村内でそれを見出すことができたが<sup>(54)</sup>、これも「解散」を具体化するための仕事の1つであったと言える。このように1926年の岡山事務所は、大原評議員や柿原清算人の指示で百田が「解散」に向けての具体的な準備を実施していたと言え、そのため再度「本部」としての役割を果たしていたことが確認できる。

百田孟一の茶臼原孤児院への来院他の状況〈表12〉

	事 項
1/13	百田来院。1/19北海道からの院児問合せ持参
1/21	百田帰途。1/25百田来院。2/5招待会出席
2/10	石井院長胸像除幕式で使用した布地で国旗を作り第二、第三殖民地に分配
2/16	館野方一泊し帰岡
3/2	岡山県からの奨励金下付の件で百田へ連絡
3/25	百田より高橋他のブラジル行の件で報告あり
4/1	百田より院児引き取り願の件で通知あり
4/11	百田より院児退院日を電報で問い合わせあり
4/21	百田来院。5/10百田来院
5/23	百田山本未亡人と帰岡。6/5小野田健一と来院
6/10	県耕地課長他を案内。6/13見学者を案内
6/25	大阪市古村よりの院児の件は百田へ相談と回答
7/25	百田来院。岡山事務所より院児退院と報告あり
8/4	県耕地課長より百田へ測量出張の招介状あり
8/16	百田帰岡。8/20百田来院
8/23	百田、小野田、長野は評議員会出席のため出発
9/26	小野田雪子夫人永眠を百田にも報告
10/6	岡山孤児院本部より解散書類到着
10/19	百田来院。10/22殖民の看護をする
10/25	出身者永眠し葬儀に列席。10/26百田帰岡
10/30	百田来院。11/11長野と記念碑用の石発見に出張
11/13	長野と木城村で記念碑用石を発見
11/26	百田帰岡

(表1 資料と同様)

## おわりに

1926年の岡山孤児院の運営体制は、「解散」という現実には直面したが、前述したように、さらに縮小はしたがただちに解体（閉鎖）することはなかった。その経緯と内容は本文中にまとめたので、再度記述はしないが、その概略を図式化すると図1のようになり、「解散」決議後も岡山孤児院の運営体制は大きくは変化せず、12月末までこの体制が継続され、

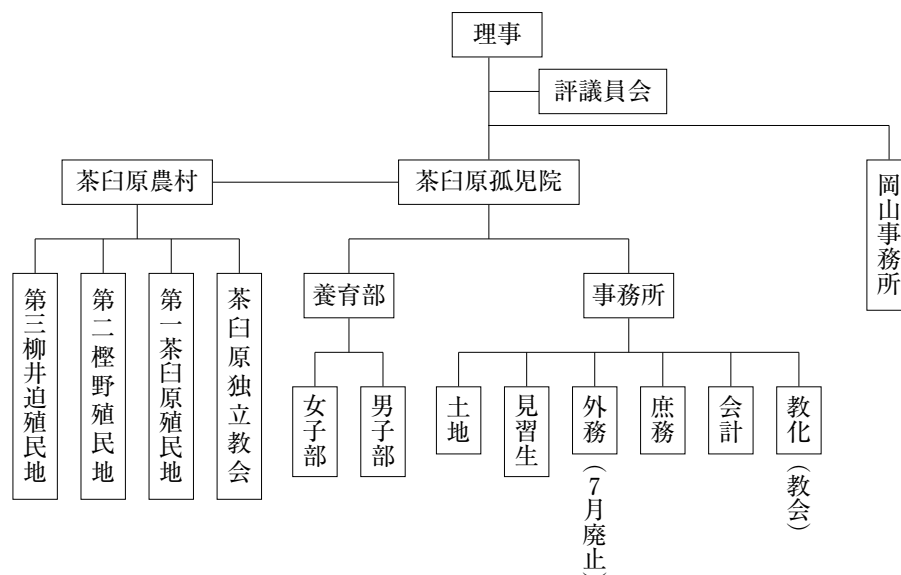
業は石井記念協会に引き継がれ、岡山孤児院の事業そのものが完全に廃止されるのは、もう少し先のことになり、見方によっては岡山孤児院はまだ継続していたと言えるかもしれない。

つまり、今後は石井記念協会の事業の実態を解明することが次の課題となり、その解明を通して岡山孤児院の「完全なる廃止」時期が確定でき、かつ、岡山孤児院解散後の石井記念協会の運営体制の展開が明らかになろう。また、その解明を以て岡山孤児院の運営体制の終焉も立証できると筆者は判断するからである。

本稿も石井記念友愛社の児嶋草次郎理事長が、「石井十次資料館」の資料を公開してくださったためまとめることができました。紙面にて感謝と御礼を申し上げます。

1926年の岡山孤児院の運営体制（案）

〈図1〉



### <註>

- (1) 拙筆「岡山孤児院の解散と運営体制の経緯 (1)」『共栄児童福祉研究』第10号、2003年3月、2頁から61頁。
- (2) 柿原政一郎著『石井十次』、財団法人正幸会、1961（昭和36）年4月、152頁。
- (3) 『法人登記申請』の「臨時評議員会決議録」。
- (4) 茶臼原孤児院『大正十五年度五月以降ノ日誌』の7/5。
- (5) 茶臼原孤児院『大正十五年度日誌』の1/18、1/29、1/30。
- (6) (5) の4/5。(4) の5/17。
- (7) (5) の4/19。(4) の7/12。
- (8) (1) の24頁。

- (9) 『岡山孤児院解散理由及び世評集』の「財団法人中央社会事業協会御中」。(4) の7/15、7/23。
- (10) (1) の44頁。
- (11) (5) の1/25、1/26、1/28。
- (12) (5) の2/5。
- (13) (5) の3/31、4/3、4/20。(4) の8/13、8/14、8/15。
- (14) 「山崎延吉氏茶臼原視察」『宮崎新聞』、1926年6月16日付。「茶臼原孤児院用地に国民高等学校建設」『同』、同年6月17日付。「岡山孤児院方針変更」「日本国民高等学校愈よ茶臼原に建設か」、「茶臼原高原は還境がよい」『同』、同年6月18日付。「古い歴史の岡山孤児院が解散す」『東京朝日新聞』、同年6月17日付。「岡山孤児院いよへ解散」『東京日日新聞』、同年6月17日付。
- (15) (4) の8/20、8/22、8/29。
- (16) (5) の4/13、4/14。(4) の5/12、5/14、5/15、5/16、5/25、5/27、6/1、6/2、6/9、6/10、6/14、6/18、6/19、6/20、6/28。
- (17) 『登記簿抄本』。
- (18) (3) と(4) の10/6、10/12。
- (19) (4) の10/13。
- (20) 『昭和二十年春作石井記念協会史料』「石井記念協会々則(案)」。(4) の12/30。
- (21) (18) の前者の「石井記念協会役員」に、4月1日付で理事他の役員が指名されていたため。
- (22) (5) の2/17、2/18、3/23、3/29。
- (23) (5) の2/25、3/14、3/15、3/16、3/22、3/24、3/30、3/31、4/12。
- (24) (5) の3/1、3/2、3/3。
- (25) 拙筆「大正期の岡山孤児院の財政の特色と実績—石井十次の死以後の財政と実践の関係—」『社会事業史研究』第26号、1998年10月、表1、159頁から161頁。
- (26) (1) の48頁。
- (27) 『大正十五年度日誌』、『週報』、『大正十五年度院児各種統計表』は、山本の筆跡であった。
- (28) (5) は山本が記述していたが4月21日で中断となったため。また、それに代って4) が末藤によって5月2日から記入されていたため。
- (29) (4) の5/16、5/17、5/18、5/19、5/20、5/21、5/22、5/23、5/31、6/13、6/14、6/22。
- (30) (4) の5/3、6/13、8/1、8/2、10/22、10/27。
- (31) (5) の3/11、3/17、3/23、3/28、3/30、4/9、4/13。なお、年長児1人は私立宮崎

産婆看護婦学校に入学しようとしたが、入学式と試験に高熱を出し入学ができなくなったようで、もう1人は深見和彦宅のお手伝（見習）となる。

- (32) (5) の3/27。
- (33) (4) の10/26、11/4、12/19、12/20、12/21、12/24。
- (34) (4) の6/27、7/15、8/31、9/2、9/4、9/8、9/10。
- (35) (20) の「石井記念協会既往事業状況」。
- (36) (5) の3/25、4/3。(4) の5/23、7/17、8/23。
- (37) (5) の3/26、3/31、4/4、4/5。庶務課『明治三十九年七月以後職員異動簿』『大正十五年三月末調』。
- (38) 茶臼原孤児院『大正十五年度院児各種統計表』『全三月末家庭人員表』、「全三月末家庭年令別表」。
- (39) (5) の1/5、1/7、1/15、1/18、3/1、3/25。
- (40) (5) の3/16。
- (41) (1) の50頁、51頁。
- (42) (5) の1/13、1/14。
- (43) (1) の34頁、35頁。(5) の2/18。
- (44) (5) の4/14、4/15。(4) の8/18。『渡航許可及旅券下附願』、『戸籍謄本下附申請』。
- (45) (4) の7/31。
- (46) (4) の9/10。
- (47) (5) の3/11、3/26。(38) の「全一月末茶臼原殖民地戸口別表」、「全三月柳井迫殖民戸口別表」。
- (48) (4) の5/26、6/4。茶臼原孤児院殖民『大正十五年五月廿七日自作農創設維持資金申込表』。
- (49) (2) の112頁。
- (50) (4) の6/15、8/4、8/23、8/24、8/25、8/26、8/28、9/3、9/4、9/5、9/20、9/21、12/24。
- (51) (5) の2/7、2/8、3/31。
- (52) (5) の3/22。
- (53) (4) の11/8、11/9、11/10、11/11、12/1、12/5、12/6、12/21、12/24、12/25。
- (54) (4) の10/30、11/11、11/13。